九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『句兄弟』の方法

石川，八朗

https://doi.org/10.15017/12219

出版情報：語文研究. 27, pp.58-65, 1969-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『句兄弟』の方法

石川八朗

一

『句兄弟』には、元禄七年八月五日の序があるが、刊行は同年冬、十一月以降かと思われる。ちょうど芭蕉が没し、以後の其角は、いわゆる蕉風に従わず、異風を顕著にして、あるいは去来の批難を受け、あるいは、後述するように、浪化や支考の批判を被ることになる。芭蕉の生前、すでに其角の作風に対する批判、憂慮のあったことも知られ、この時期が、其角晩年の異風への傾斜をはらんでいたことも予測される。さらに、この書は、句合の形をとり、自ら判詞に相当する文章を添えているので、三年前の『雑談集』と同じく、其角の俳諧に関する意見を徴し得る。

以下、この書にうかがわれる其角の俳諧意識について、その意味を考えたい。

二

『句兄弟』の序に、

案するに句ことの類作、新古混雑して、ひとりこと〳〵くには諧(ソウラン)しかたし、然るを一句のはしりにて聞なし作者深厚の吟を放狂して、一点の付墨をあやまる事自他の悔旦暮にありと見えるのが、この書編集の動機を示している。「句ことの類作、新古混雑して」一一記憶にとどめがたく、批点を求められても、「作者深厚の吟」をもいい加減に見て、付墨をあやまることが多いという。その点者としての悩みが、等類についての関心を強くさせたものと思われる。

「句ごとの類作、新古混雑して」はまた、作風が停頓し、軽薄な模倣を事とするといった俳壇の状況を思わせる。其角の場合、特に作者の主体的表現ということに意識的であったようなので、その点からも、等類が問題になったものと思われる。

『句兄弟』句合三十九番は、其角句「声かれて」を兄とし、芭蕉句「塩鯛の」を弟としていて、他の三十八番とは異なる。附された其角の自評によれば、其角の「声かれて」に感心のよしにて、「塩鯛の」の句が作られた。猿の歯の冷しさに、塩鯛の歯ぐきの寒さを思いよせて作ったものであった。この両句、元禄五年十二月三日付意専宛芭蕉書簡[註1]に見え、右のことがあったのは、この日であったらしい。さらに其角はいう。

此句は猿の歯と申せしに合せられたるにはあらす、只かたはらに侍る人、海士の歯の白きはいかに、猫の歯の冷しくてなとと似て似ぬ思ひよりの発句にはなるましき事ともに作意をかすめ侍るゆへ、予か句先にして師の句弟と分け、其換骨をさとし侍る。

「海士の歯」や「猫の歯」云々は、其角のいう「句ごとの類作」が生まれる発想の場をのぞき見た感じで興味深い。これに対して其角は、「をのれが煉磨」によって、「発句一つのぬし」になるべきことを述べている。これは其角の持論であった。[註2]

『句兄弟』句合の冲三十九番のみが、其角の句が兄、芭蕉の句が弟となっているのは、右のような事情による。この元禄五年十二月三日という時期から考えても、この芭蕉庵でのやりとりが、其角が『句兄弟』の句合を試みようとした直接の契機となったのではないかと思われる。

三

以上述べたような動機に立ち、契機を得て、其角は、『句兄弟』句合を思い立ったのであったが、その方法について、序に述べるところがあった。

されはむかし今の高芳の秀逸なる句品三十九人を手あひにしておかしくつくりやはらけ、おほやけの歌のさま、才ある詩の式にまかせて私に反転の一体をたてゝ物めかしく註解を加へ侍る也、此後俳諧の転換その流俗に随ひ侍らは一向壁に馬なる句体なりとも聊の逊道を工夫して等類の難をのがれぬへし「私に反転の一体をたてゝ」というのが、その方法であったわけであるが、「反転の一体」とはどのようなものであろうか。右の序文の冒頭に「点ハ転ナリ転ハ反なりと註せしによりて」とあり（この一節を冒頭に置いた意図はよくわからない）、点＝転、転＝反であるということであれば、「反転」は点の一字に帰せられる。これはどういうことだろうか。

ここで次のことが想起される。それは、其角が板下を書き与えたという泥足撰『其便』[註3]（元禄七年刊）に見える記事である。

点化句法

両国橋上吟

千人が手を欄干や橋すゝみ　晋子

并に舟中の吟

此人数船なれはこそ涼み哉　仝

この「点化句法」であるが、この前の句は、『浪化俳句集』（岩谷山梔子編）に

随聞記に

東坡か詩に玉手千人ノ枕とあるを

千人か手を欄干や橋涼み　其角

これは両国橋上の吟なり

と見えるもので、『其便』の「点化句法」は、東坡の詩との関連で考えらるべきもののようである。

確かに、「点化句法」の語は詩書に見える。たとえば、『氷川詩式』――『句兄弟』序に「才ある詩の式」というのはこれをさすのであろうか――がそれである。梁橋著、詩作法書である。当時和刻本もあり、沾徳撰『誹林一字幽蘭集』（元禄六年刊）の参考書目にもかかげられ、一般に読まれた書であったこ

とがわかる。

その書中、「五言練句法」「七言練句法」があり、それぞれ「点化古人ノ詩ヲ句法」が見えて、詩句を例示する。

野水無二人ノ渡一　孤一舟盡日横一

の詩句をあげて、

此唐ノ韋応物カ詩冠準化シテ作二二句一ト

と註する。[註4] 韋応物の「滁州西澗」中の一句「野渡無人舟自横」を二句としたものである。また、『詩人玉屑』には、「点化」の一項が存して、次のように説く。

詩家有換骨法謂用古人意而点化之使加工[註5]

先行作品のいわゆる換骨奪胎であって、「点化」は、詩書の術語であったが、また和歌の技法にも同様のものが見られないではない。本歌取りがそれである。其角が『句兄弟』序で、「おほやけの歌のさま」といい、跋で沾徳が「さよ更るまゝに汀やこほるらむ遠さかり行志賀の浦波とよめるに志賀のうらや遠さかり行波間より氷て出る有明の月と家隆卿のよめるも、皆是全体詞を外に求めすして風体たくひなき物か」としているのは、本歌取りの面から、『句兄弟』の試みを述べたものである。本歌取りについては、『八雲御抄』――「おほやけの歌のさま」は、この書のことをさすか、――に「一には詞をとりて心をかへ、一には心なからとりて物をかへたるもあり」と見えている[註6]

其角のいう「反転の一体」は、点化句法や本歌取りのような方法をいうのではないかと思われる。「反転の一体」と詩歌とは別の名目をたてたのは、一つには、俳諧独自の名目をということであろうが、また「反転」の語から考えれば、句境を一転させる点に眼目があるようで、もともと等類を避けるということを目的とした試みなので、転化ということを強調しようとしたものであろうか。

その「反転の一体」の理論的根拠あるいは権威づけとして、点化句法や本歌取りが持ち出されたのであるが、そのことを説いて、跋を沾徳が書いていることに注意したい。沾徳は、歌学に通じ、また林家に出入したことも知られており、[註7] 俳人たちの中では、知識人的存在であった。元禄六年、その撰した俳書『誹林一字幽蘭集』には、所収句の多くに典拠と考えられる詩歌文章を傍記していて、衒学的との評もあるが、むしろ点化句法的作法に関心を寄せていたことのあらわれとも考えられるのではなかろうか。沾徳は、後の『余花千句』（宝永二年刊）『後余花千二百句』（享保八年刊）でも、出典を上欄に示しており、この風は淡々にもうけつがれているようである。

芭蕉が、

ほととぎす声や横ふ水の上
一声の江に横ふやほととぎす

の句を作って、「水光接天白露横江の字句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推敲難定処、水沼氏沾徳と云もの弔来れるに、かれ物定のはかせとなれと両句評を乞」うたのに、「横江の句、文に対して考之時は句量尤いみじかるべければ、江の字抜て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方におもひ付へきの条」を言っているのは、[註8] 点化句法の発想の実際を見るようで興味深いことである。

其角が『句兄弟』句合の方法として、「反転の一体」を立て

たのは、沾徳との交渉から出たものかと思われる。

四

『句兄弟』句合の判詞によって、その発想をうかがってみると、例えば、二十番の

つたなさや牛といはれて相撲取　彫棠

に対して、自句

上手ほど名も優美なりすまひ取

について、

句の裏へかけたり

といっているが、相撲取の本情を逆の趣向によって表現しようとしたものである。

また、十五番の、

人先に医師の袷や衣更　許六

に対して、自句

法体も島の下着や衣かえ

について、

法躰と医師のはれがましさは一意なれども興ことにかはりあるゆへ

と述べていて、やはり同じ情感を異なる素材によって表現したものであった。

また、同じ趣向や素材によって異った情感を表現しようとした例も多い。例えば、六番の、

三線やよし野の山をさ月雨　曲水

に対して、自句

三味線や寝衣（ネマキ）にくるむ五月雨

について

倦（ウ）むと忍ぶとのたかひ決せり

というのなどである。

他に、続腰の格とか、一字血脈の格とかいう詩作法の用語[註9]で説かれているものがあり、句のふりや句勢の強弱で分けているものもあるが、兄句の素材や趣向を踏んで、新らしい情感を表わすとか、兄句の情感を受けて、素材や趣向の面で新らしさを出すという方法が基本的であり、当然ながら、それは「点化句法」や本歌取りの、つまりは「反転」の方法であったわけである。

しかし、むしろ我々の興味をひくのは、句合の弟句の発想のあり方そのものではなくて、判詞に語られた其角の句作意識であり、その、彼の実作活動との関連であろう。

五

『氷川詩式』や『詩人玉屑』によって明らかなように、「点化句法」は、詩家が詩句を錬磨する方法の一つであった。『句兄弟』は等類句頻出という俳壇の状況に際して考えられた其角なりの処方であったが、むしろ彼の句作の方法として、句を錬磨するものとして意識されたのではなかろうか。

同じ『句兄弟』に、「謡物三十六番」と題した、粛山、其角彫棠の三吟歌仙があり、各句謡曲の詞章を含んでいる。初表のみを示すと、（圏点筆者）

1、飛蛍我も休むは苦しいか　粛山

2、　かだみて魚は夜川涼しき　晋子
3、酒債すむ旦暮月もはや入りて　彫棠
4、　秋の花みな切溜の桶　山
5、淋しくも人や見るらん刀持　晋
6、　後るゝ徒士(カチ)はかつく袖笠　棠

圏点の部分が謡曲であるが、1卒都婆小町、2鵜飼、3雲林院、4野宮、5玉葛、6芦刈によっている。そして、その歌仙の序ともいうべき文章があって、其角の意図を明らかにする。すなわち、

1諷の詞のみにかぎらず古詩古歌経釈ともに縁になるべきつづきをたやすく言いとるのは、その句の功であること。

2文句にかかわらずして一句にたつことが本意であること。

2の「文句にかかわらず」とは、謡曲の詞だけを借りるので、その謡曲の内容との関連はないということであろうか。右の表六句の例を見ても、詞のみを借り用いて、一句全体の意味風趣は、全く別に「一句にたつ」ているといえる。

これも、広い意味では点化句法の一つといえよう。

さきに記した『其便』の「点化句法」

両国橋上吟

千人か手を欄干や橋すゝみ　晋子

は、東坡の詩「玉手千人枕」の「千人」「手」をかすめたものであったが、次の句のような場合も、点化句法といい得るであろう。

しら雲に鳥の遠さよ数は雁　其角

『末若葉』所収のこの句については、芭蕉が、「晋子がこのほどの俳諧をきけば、玉振金折の作をもとめて天下の人を驚さむとす、是より五年の変化をはからず、二作をかさねば平話を失ひ、三作をかさねば俳諧はつきて自己を失ふへし」（十論為弁抄）と評したという。まさに、其角の後年の異風への傾斜を言いあてた、みごとな予見であるが、「しら雲に」の句は、どういう点が作を求めたというのであろうか。

この句は、『五元集』牛門書入に指摘するように、[註10]『古今和歌集』巻四秋之上部の

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月

によっていることは明らかであろう。遠く飛ぶ雁の群をまず「鳥の遠さよ」といい、座五に、その鳥が「数」多く飛んでいることをいい、最後に「雁」を置いて一句が季感を得て治定する「数は雁」という破格な表現によってまとめたものである。「鳥」が「雁」であることが、座五の、最後の語で示されて、はじめて一句のイメージがはっきりするところに、この句の技巧があり、しかも「数は雁」という破格な表現をとっているところが、作意が云々されるのであろうか。

其角は、『句兄弟』句合判詞の中で、題に、縦の題すなわち「詩歌連俳ともに通用の本題」と、横の題すなわち俳諧題のあることをいい、

縦の題には古詩、古歌の本意をとり連歌の式例を守りて、文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を専一にすへし

と述べ、さらに、

縦ぞと心得て本歌を作なくとり、時鳥の発句せしなどあて仕舞なる案しやうは無念也

と作意なく本歌を取ることを戒めている。

「雁」は縦の題である。白雲に遠く雁が群れとぶという古歌の本意に従いながら、「文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を専一に」して、前述のごとく、座五の表現によって、俳諧性を得たということであろうか。

其角はまた『句兄弟』句合三十五番で、縦の題についても、「俳諧よりおもひ入」ることを述べている。

郭公啼ノ〳〵飛そいそかはし　蕉
若鳥やあやなき音にも時鳥　角
　此躰は俳諧よりおもひ入たる也

また、三十二番の、

傘持は大根ねらふ子日哉　柴雫

について、

屏風の絵をよまれし姿にも春の野の子日の躰は興うるはしく聞えぬるに傘持たる丁(ヨホロ)のさまは今更俳諧より気付ておかしくおもひ合たるもの哉

と述べている。「子日」は縦の題で、貴人の野遊びの趣きを本意とするのであろうが、「丁(ヨホロ)」に目をつけたところが俳諧なのであろう。

また、三十番の句は、

兄
草刈や牛より落ておみなへし
弟
牛にのる娶御(ヨメノコ)落すな女郎花　春澄

であるが、評に、兄の句について、

遍昭の馬を引かえて、さか野の草の名にたてしも、京流布の一作なから

とあって、『古今和歌集』巻四秋之上部の

名にめでて折れるばかりぞ女郎花
　我落ちにきと人に語るな　遍昭

によるものであることはいうをまたないが、春澄の句は、遍昭のかわりに嵯峨の草刈男と俗にした俳諧化の作意によって、京の俳人たちに流布した。其角の句はさらにそれに作意を加えて、

なにとなく京田舎の躰になして、花の名はかりそめによせぬれば、落るといふ字もかこつけなるへし、是等は俳諧の排(スレ)原也(モトヲ)

というごとく、「牛にのる娶御(ヨメノコ)」に田舎らしさを表わし、「落る」は、遍昭の和歌では、「女郎花」を美しい女性として、その愛欲にひかれて戒を破るという意に用いられている。「女郎花」と「落る」がそういう関係で、和歌の本意となっているのであるが、其角の句では、素材としてのみ、「女郎花」「落る」を用い、形の上では残しながら、和歌的本意を抜き去ってしまったのである。花嫁を落すなというのは、女郎花とはかかわりのない発想である。「女郎花」は「かりそめによせ」た、あしらいであり、「落る」も、形の上で応じた「かこつけ」にすぎない。其角は、「是等は俳諧の推(スレ)原也(モトヲ)」といっており、遍昭の本歌によりながら、本意を抜いた発想に、俳諧よりおもい入るといった働きがあるというのであろう。

其角の点化句法は、古詩古歌経釈あるいは謡曲の詞句などにまで範囲をひろげて、その用語素材を生かしながら、俳諧的な

発想や措辞によって新しみを得ようとするものであった。

これは、いわゆる軽みの、故事による発想や作意を排し、平凡な日常語による句作を考えていた芭蕉の方向と全く異なるものであったことはいうまでもない。芭蕉に其角の作意を重ねることへの批判があるのも当然であった。

六

其角は、『句兄弟』序の中で、

此後俳諧の転換その流俗に随ひ侍らは一向壁に馬なる句体なりとも聊の逊道を工夫して、等類の難をのかれぬへし

といっている。「壁に馬」とは、「壁に馬を乗り掛ける」という意味で、「突然に、あるいは無理に物事をする」という意味に用いられているものであろう。この「壁に馬なる句体」は、後に例えば『焦尾琴』『三上吟』にあらわれて、浪化の

武の其角か俳諧は、この比の焦尾琴三上吟を見るに、おほくは唐人の寝言にして、世人のしるへき句は、十句の中一二句には過し（東西夜話）

という、また、支考の、

たとへは九重の塔にのほりて、あとの階子をはつしたることく、見る人其行筋をしらす、晋子か門葉の耳なれたる人は、掌中の玉を見るよりなをあきらかにしりたれと、それは一時の流行のみにして、千歳の後は国のはんし物なり（東西夜話）

という批評によって、見とどけられているが、支考は、その原因を、芭蕉の指摘した「二作三作におよぶ」其角の作を好む風に求めている。

支考や浪化が、疑問を持って評した、この其角の作風に関する意見は、そのまま彼らの風体についての考え方の反映であったわけで、支考の姿情論が、「姿先情後」としてとらえられ、姿の重視が認められ、表現に際しての「私意」「理屈」の排斥にそのモチーフがあることは堀切実氏が指摘しておられる。[註11]

姿情について、其角の場合はどうであろうか。情については『雑談集』に、

俳諧に新古のさかひ分がたし、いはゞ情（ジヤウ）のうすき句は、をのつから見あきもし、聞ふるさるゝにや、又情の厚（アツ）き句は、詞も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ぬるゆへ、時に新しく、不易（エキ）の功あらはれ侍る

と、最もこれを重視する。姿については、『句兄弟』句合二十八番の判詞に、

古代の作者は句のおもてをかざらず、近代は句のふりをたしなむかはりあれど

と、「句のふり」―姿を重視する最近の風を認めてはいるが、特に情に比して重視した形跡はない。逆に、『句兄弟』句合の判詞には、例えば、十番の、「干瓜や汐のひかたの捨小舟」という古風の見立の句を、「古来掉頭の秀作」と見、十八番の「花ひとつたもとにすかる童かな　立圃」について、「されば当時云かけの発句を珍賞せすしていたつらに古版の書に埋もれ侍るを予歎美して古人の深察を再転せり」といい、三十六番の「風まつはきのふをきりの一葉哉　望一」について、「中七字の云かけを結句幽玄におもひて」と述べるなど、見立や云かけのような、一句の姿の統一をそこない、理屈の入りこみやすい技法を、当時の風に反して、幽玄として珍賞しているのである。

姿の問題は、其角にとって情ほどには重視されるものではなかったようである。支考風にいえば、情先姿後ということになろうか。

其角の「壁に馬なる句体」を容認する志向は、この情先姿後の傾向が本来存したことが背景になっているのだと思われる。

七

以上のように、点化句法や情先姿後という意識の傾向が考えられるが、これらは、芭蕉晩年の方向とは著しく異なっている。これらの作意をたくみがちな方法や意識が、其角の「発句一つのぬし」になる理想と結びついて独自の表現をとるところに、晩年の異風を展開する一因があるのではないかということが考えられる。晩年の異風を形成する要素は、なお他にも種々考えられなければならないが、いま『句兄弟』によってうかがわれるもの一二について述べた。

註

1 『校本芭蕉全集』書簡篇P177

2 拙稿「其角の芭蕉観から」（連歌俳諧研究才三十号）

3 『日本俳書大系』蕉門俳諧前集所収

4 万治三年版による。巻三。なお同書には、健句、新句、清句、偉句、麗句、豪句の分類も見え、其角はこれも『句兄弟』の中で発句の分類に用いている。

5 中国書局版による。上巻P193

6 『日本歌学大系』巻三P83

7 小高敏郎氏「芭蕉と同時代文壇」（『近世初期文壇の研究』所収）P555

8 元禄六年四月二十九日付荊口宛芭蕉書簡（『校本芭蕉全集』書簡篇P195）

9 『氷川詩式』巻七に、説明と用例が見える。

10 明治書院刊『五元集』P112

11 堀切実氏、「支考の「姿情論」に関関する一試論」（連歌俳諧研究才三十号）